

あるロシア歌謡の歴史

いわゆる「ソフィヤの歌」について

中村喜和

1

伊勢の漂流民大黒屋光太夫がロシアからもたらしたかずかずの珍奇な異国土産のなかに、ロシア歌謡一篇が含まれていた。故国をはなれて生きる者のやるせない気持をうたった内容のものである。

光太夫がロシア最初の遣日修交使節アダム・ラクスマンにともなわれて蝦夷のネムロに帰着したのは、勢州白子の港を出帆してからちょうど10年目の寛政四年（1792）9月のことであった。翌寛政五年、光太夫は江戸に送られ、幕府の取調べを受けた。祖法の鎖国令を犯したものとして罪人の扱いをされたのである。その後光太夫は、いっしょに帰国した水夫磯吉とともに番町の薬園に收容され、文政十一年（1828）78歳で没するまで、ついに薬園から出ることを許されなかった。

光太夫らの漂流から帰国にいたるまでの経緯、酷寒の地での苦難にみちた体験、欧亜にまたがるロシア滞在中のさまざまな見聞については、帰国後にうけた審問での調書の形をとる『北槎異聞』をはじめとして、数種の記録が伝えられている。このうち最も充実した内容と整った体裁をもっているのは『北槎聞略』である。編者は蘭学者として名高い将軍家侍医桂川甫周で、序文には本書成立の事情が次のように記されている。

臣国瑞〔甫周の諱——中村注〕内旨を奉し、彼国制、地俗、居廬、飲食、諸瑣事に至るまで詳問訊究し、更に中国の紀載西洋の書冊に出るものと参訂改補して附按となし、書十二卷¹⁾函二卷を作り、甲寅の秋に至りて書成て上る。

甲寅は寛政六年、すなわち甫周は光太夫上府の年に『漂民御覽之記』を著したのに

つづいて、その翌年にはこの大部の聞き書きを完成したことになる。本文 11 巻と別にオランダ人から得た資料にもとづく「魯西班略記」を附録に配し、光太夫将来の地図・器什が詳細綿密に写しとられている。その説きおよぶ範囲の広い点で本書は 18 世紀ロシア社会の百科辞典の観を呈し、詳細な「附按」を有することでは一種の研究書とみることもできる。

さて『北槎聞略』巻之九のうち雑載の項に次のような記事がみられる。

光太夫が身のうへをブシが妹ソヒヤイワノウナ歌につくりてうたひはやらかし、都下一般にうたひけるとぞ。その唱歌は

あゝ たいくつや 我 他^{ひと}の 国 みなみなたのむ
アハ スクシノ メニヤ ナツゾイ ストロネ フセネミロ

みなみなすてまいぞ なさけないぞやおまえがた なさけないそやおまえかた
フセッポステロ ドルガメロワネト ドルガメロワネト

見むきもせいで あちらむく うらめしや
ナギレテラテ ヤナシウエタ チトッピワロ

つらめしや いまは なくばかり
ウテシャーロ ヲトム プラッチノ

是は光太夫が訳せしなり。²⁾

注

- 1) 亀井高孝校訂『北槎聞略』略引, 昭 12, p. 1.
- 2) 同上, p. 267 - 268. 亀井教授の校訂は同教授の家蔵本を底本とし、内閣文庫所蔵の最善本を校合に用いている。この歌の部分に関するかぎり、將軍に進献された正本とみられる内閣文庫蔵本と、本論に引用した校訂本テキストとのあいだに相違はない。しかし内閣文庫に属する他の二本の写本（うち一本は安政四年の筆写、他は不明）では、この歌の片仮名表記がかなりくずれている。たとえば校訂本で「ナツゾイ」とあるところ、安政四年本では「ナツソイ」、年代不明写本では「ナツツイ」とある。いずれも転写のさいの誤りであろう。

2

天明二年（1782）12月光太夫を船頭とする神昌丸が伊勢白子の港を出帆してまもなく遭難し、半年あまりの漂流ののちによやく流れついたのはアレウト列島中のアムチトカ島であった。アレウト列島は当時ロシアに属しており、土民のなかにロシア人の商人が駐在していた。アムチトカにあること4年、光太夫らは本土のカムチャツカに移され、やがてシベリア統治の中心地イルクーツクに送られた。イルクーツクに着いたのは1789年のはじめで、このときまでに神昌丸の最初の乗組員17人は6人に減っていた。光太夫らはあくまで帰国の望みを捨てず、イルクーツク総督に日本送還の願書を提出すること三度に及んだ。しかし総督は漂流民らが創設以来半世紀以上の伝統をもつ日本語学校の教師になることを望んでいたため、さまざまに手をつくして引き留めようとした。イルクーツクで光太夫らに深い同情をよせたもののなかにキリール・ラクスマンがいた。ラクスマンはドイツから帰化した博物学者で帝室アカデミーの会員であった。1791年のはじめ（旧ロシア暦、以下同じ）、公務で上京するラクスマンとともに、光太夫はペテルブルグにおもむいた。直接政府に対して帰国の請願を行なうためである。露都ではラクスマンの奔走もあって、光太夫の目的は達せられ、エカテリーナ二世から帰国の許可があたえられた。イルクーツクまで生きのびた6人の漂流民のうち1人は病死し、2人はロシア正教に帰依していたので、光太夫と2人の水夫、小市と磯吉だけが、こうしてキリールの子アダム・ラクスマンによって蝦夷に送り帰されたわけである。もっとも小市はネムロで冬営中に病死し、ついに故国の土をふむことができなかった。

光太夫がペテルブルグに出たのは1791年の2月中旬であったが、この年の5月からは首都郊外にあるツァールスコエ・セローに移った。当時ロシアの帝室は夏のあいだツァールスコエ・セローの離宮にとどまる習慣があり、光太夫はその間にエカテリーナ女帝に拝謁を許されることを期待していたのである。ツァールスコエ・セローで光太夫が寄寓したのが「プシ」すなわちオシーフ・イヴァーノヴィチ・ブーシュのもとにほかならない。ブーシュはキリール・ラクスマンの友人で、離宮の御苑長の職にあった。名前から明らかなように、ブーシュもラクスマン同様、北欧系の帰化人であった。

ブーシュの妹ソフィヤについては、光太夫がさきあげた歌の作者としていること以外、全く不明である。

しかし『北槎聞略』にはソフィヤ・イヴァーノヴナと名の婦人がもう1人登場している。「執政トルッチニノーフ」なるものの妻で、エカテリーナの女官のひとりである。彼女はペテルブルグで政府の高官たちと光太夫が郊外に出遊したさい光太夫を「娼家」にさそっていること、光太夫がペテルブルグを去るとき「旅中第一の食料」七面鳥の蒸焼5羽を餞別として贈ったことなどからみて、光太夫とはかなり親しく交わっていたものと思われる。光太夫がエカテリーナに謁見したとき女帝の下問を取り次いだのもこのソフィヤであった。さらに「娼家」に同行したもののなかに離宮御苑長ブーシュが含まれていたことを考え合わせると、トルッチニノーフの妻をブーシュの妹とする推定はあながち突飛なものとは思われない。このソフィヤについて「娼家」のくだりで「此婦人はもと女王の侍女にて婦人にては甚高官の人なり」とわざわざ注が付されていることは、彼女が啓蒙君主エカテリーナに愛された才気煥発の女官であったことを示唆している。

なお「執政トルッチニノーフ」は、中佐相当官で名をヴァシーリー・ペトローヴィチといい、「鍛冶」を営んでいるとあるところから、おそらくエカテリーナの秘書官のひとり、ウラルの有力な製銅業者トルチャニノフ Турчанинов の一族につながる者であったと考えられる。

しかしながら、ブーシュの妹ソフィヤをただちに「ソフィヤの歌」（以下、光太夫のもたらしたテキストを含めすべてのヴァリエントをかりに「ソフィヤの歌」と総称する）の作者と断定しかねる事情は後に述べるとおりである。

注

- 1) 上掲『北槎聞略』, p. 203.
- 2) 同上, p. 47.
- 3) ロシア文学研究所の Ю. К. Бегунов 教授の1965年10月8日付私信によれば、モスクワおよびペテルブルグの両外人墓地にソフィヤ・イヴァーノヴナ・ブーシュ Софья Ивановна Буш なる人物は埋葬されていない由。この事実も彼女が結婚して改姓したという推定を支持している。
- 4) 上掲『北槎聞略』, p. 203.
- 5) 同上, p. 138.
- 6) Павленко, Н. И. История металлургии в России XVIII века. М., 1962, стр. 266 - 270 によれば、18世紀中葉製銅業者として辣腕をふるった А. Ф. Турчанинов (1737年に結婚)の子にピョートルという子がいたという。ヴァシーリー・ペトローヴィチはその子ではあるまいか。

3

『北槎聞略』が片仮名で示している「唱歌」はどのようなロシア語をあらわしているのでしょうか。復元の試みはすでに二つある。まず、平岡雅英氏はかつて次のような案を提示した。

Ах! скучно мне на чужой стране,
 Все не мило, все опостыло,
 Только милого нет,
 Только милого нет,
 ……я шел это, что было,
 Утешал о том и плакал.¹⁾

この読み方にはロシア語としてすでに意味のとりにくい点もあって、首肯しがたい。もっとも平岡氏のよった片仮名テキストは、さきにあげた亀井校訂版『北槎聞略』のそれとは若干異なっていることを指摘しておく必要があろう。念のためにその全文をかかげよう。(前掲テキストとの異同を示す下線と○は便宜上筆者が付したのもの)

アハ スクシノ メニヤ ナツソイ ストロネ
 フセネミロ フセツボステロ
 トルカメロツネト
 トルカメロツネト
 ナキシテラテ ヤ○シウエタ チトフヒツロ
 ウテシヤーロ ラトム フラクチノ

平岡氏の利用したテキストの出典は明らかにされていないが、おそらくオリジナルから数次の転写を経てくずれた写本と考えられる(第1節, 注2参照)。

もうひとつの試みは、最近ソヴェトの日本研究家 В. М. Константiнoв氏が「ソフィヤの歌」についての短い論文のなかで示した次のような読み方である。

Ах, скучно мне
 На чужой стороне:
 Все не мило,

Все постыло,
Друга милого нет !

Друга милого нет,
Не глядел бы я на свет !

Что, бывало,
Утешало,
О том плачу²⁾ я.

この復元にはほとんど問題がないように思われる。ほとんど、というのは、第二節第二行は

Не глядела бы я на свет !

あるいは

Не глядела-б я на свет !

と読むのが適当と考えられるからである。その理由は、少なくともこの歌詞から判断するかぎり、この歌は恋人を失った、ないしは恋人と別れた女の立場からうたわれている、という点にある。「ナギレテラテ」という片仮名表記からみても、не глядел……は не глядела……と改むべきであろう³⁾。

上記の論文のなかでコンスタンチーノフ氏は、この歌が語句に若干の変更を加えられて、『北槎聞略』成立におくれること2年の1796年モスクワで出版されたロシア歌謡集にはじめて収められていると述べ、それ以後も幾種類かの歌謡集に収録されたり替え歌がつくられたりしていることを紹介している⁴⁾。

『北槎聞略』に示された「ソフィヤの歌」の片仮名による表記の問題点、ならびにこの転写を通じてうかがわれるロシア語の特徴は次のとおりである。

スクシノ скучно はすでにモスクワ方言にしたがって скушно と発音されていたものと推定される。

メニヤ меня ではなく мне がくるべきところ。『北槎聞略』巻之十一言語部に収められた語彙集にも мне назад をメニヤナザテ, мне подарил をメニヤボダリヲとあらわしている例がある⁵⁾。

ツゾイ чужой を示すことは明らかであるが、ツは ч→ц のツォーカニエであろう

か。ЖО をゾであらわしているのはソフィヤのドイツ訛りに影響されたためとも考えられるが、前記語彙集に жарко ザルコ、жена ゼナ などの事例があるので、単に転写上の特徴とうけとるべきかもしれない。

ストロネ стороне をこうあらわすのは, постыло ポステロ, о том オトム などとならんで, О-カーニエを示している。この点ではモスクワ方言に特徴的なアーカニエと対立している。

フセネミロ フセツポステロ フセは все ではなく всё がくるべきところ。「みなみな」という訳語からみて、光太夫がまちがっておぼえたか、のちに誤れる訂正をほどこした可能性もある。

メロワ ми をメで示す理由は不明。また力点をもつ音節のあとの-о がオ段で示されないのもここだけである。

ナギレテラテ не をナ, бы/б をテとしているのは光太夫の記憶ちがいがい、あるいは編者が聞きとるさいの誤りであろう。しかし глядела の де をテとしていることに対する類例としては、語彙集に звезда をズデズテとしている事例がある。一般に有声子音を無声化している場合は多い。

チトツピワロ что が што とならない点では、モスクワ方言に対立する特徴を示す。ピワロ бывало によく似た例としては、やはり語彙集に близко ピリスカ, бритва ピリッパ がある。

プラッチノ плачу の чу がここではチ（ノは長音符号ーの誤記とすれば、チー）であらわれていることが注目される。

結局, скушно は別として、他の点では概して 18 世紀末のペテルブルグの方言が優越しているとみるべきであろう。

「是は光太夫が訳せしなり」と編者桂川甫周が述べているのは、いうまでもなく、片仮名文のかたわらにふられたルビをさしている。いまこれをロシア語の歌詞にならって行わけすれば、次のように読める。

あゝ たいくつや 我
 ひと
 他の国
 みなみなたのむ
 みなみなすてまいぞ
 なさけないぞやおまえがた。

なさけないぞやおまえがた
 見むきもせいで あちらむく
 　　うらめしや
 　　つらめしや
 いまは　なくばかり。

光太夫の訳にはいわゆる逐語訳とそうではない部分が入りまじっている。とりわけ第一節の最初の二行はほぼ一語づつに区切られ、完全に逐語的に訳があたえられているが、全体の口調からいえば、一行目の「我」は切りすてるか、あるいは二行目に入れたいところである。

もっとも光太夫がここでいわば最も文学的な翻訳を意図したとは思えない。序文で將軍の発意をうたっている『北槎聞略』の性格が、語り手たる光太夫にも記録者たる甫周にもある種の制約を課していたことは容易にも想像される。第一節第五行、第二節第一行は「いとしい友（恋人）はいない」と解されるが、これを「なさけないぞや……」と訳したのは、公儀に対する遠慮によるものかもしれないのである。

注

- 1) 平岡雅英『維新前後の日本とロシア』、昭9、p. 130-131（同氏『日露交渉史話』、昭19、p. 132）
- 2) Константинов, В. М. Первая русская песня в Японии, 《Новый мир》, 1961, No. 5, стр. 279.
- 3) 村山七郎教授がすでに指摘しているとおり、『北槎聞略』におけるロシア語の発音転写では、πは子音のまえではウと表記され、語末では脱落する傾向がみとめられる（『北槎聞略』第二版、昭40、巻末論文「大黒屋光太夫の言語学上の功績」、p. 9-10）。
- 4) Константинов, В. М. op. cit., p. 280. なお、同氏は『北槎聞略』の記述によって「ソフィヤの歌」の作者をソフィヤ・イヴァーノヴナ・プーシュとする断定をごく最近の次の論文でも繰り返して述べている。На заре русско-японских отношений. 《Международные связи России в XVII-XVIII вв.》 М. 1966, стр. 477.
- 5) 佐藤純一氏の示教によれば、『北槎聞略』の語彙集には、メニヤ同様, снег シネヤカ, поехал ポヤハウのように e (それもかつて e で示された e) をあたかも я のように転写している事例がある。
- 6) 村山教授, 前掲論文, p. 16.
- 7) 『北槎聞略』巻之十一言語部語彙集で,リュピリウ люблю (=амо) だけに訳語をあてていないのも同じ理由によるものであろう（上掲校訂本, p. 310）。

4

修交使節アダム・ラクスマンがエカテリーナ号に坐乗してはじめて来日したとき、随員のなかにバビコフなるものがいた。『北樞聞略』巻之一の船號同夥人名に「商人 ウラスニキフルウィチバビコフ 子三十一歳¹⁾」とあるのがそれで、イルクーツクから光太夫と同道してきたものである²⁾。

元来ロシアの対日使節派遣の主たる目的のひとつが、両国間の交易の開始にあったことは、エカテリーナが 1791 年 9 月 13 日付をもってイルクーツク総督ピーリにあたえた勅書からも明白である。すなわち、

……これら日本人の母国送還は日本との通商関係樹立のよき機会となるであろう。けだし海上至近巨離に位置し、直接の隣邦たる資格において、ヨーロッパのいかなる国といえどもわがロシアほど有利な立場にはない³⁾のである。

この勅書はさらに「イルクーツク市の商人を勧誘して、日本国において需要の見込みある商品を携行せしめ、これを売却して日本商品を買求め⁴⁾らしめること」という具体的指示をも含んでいたといわれ、国庫およびシュレホフ＝ゴリゴフ商会（のちの露米会社）の資金によって調達した火薬、羅紗、本綿、鏡、刀、鉄・ガラス製品を積み込んでいた⁵⁾。商人バビコフはたぶん交易用の商品の宰領ならびに使節の通商顧問の資格で一行に加わっていたのであろう。

漂流民の送還には成功したもののラクスマンの使命は結局果たされず、幕府から長崎来航の信牌をあたえられただけで、エカテリーナ号は 1793 年 6 月松前を去ったが、バビコフは蝦夷滞在中、すなわち根室、松前、箱館のいずれかの地で、「ソフィヤの歌」を書きのこしていった。これを伝えているのは文化八年（1811）から同十年にかけて松前に抑留されていたディアナ号艦長ゴロヴニンで、ロシア帰還後に出版した『日本幽囚記』のなかで次のように述べている。

日本人はわれわれロシア人が東洋の文字を珍重するように、ロシアの文字を珍重している。彼らはある扇子を見せてくれたが、そこには《Ах! скучно мне на чужой стороне》という歌が 4 行に書いてあって、ラクスマンとともに当地をおとされたバビコフ某のサインがしてあった。彼らがここに来たのはもう 20 年もまえのことであるのに、その扇子はしみひとつなく、真新しかった。持主は数枚の紙に

包んでこの扇子を保存し、めったな事では他人の手にふれさせない⁶⁾のである。

バビコフが扇面に揮毫した歌が「ソフィヤの歌」であったことはまちがいない。4行とあるからには、おそらく第一節をすべて含んでいたのであろう。バビコフがこの歌を光太夫から聞いておぼえたのか、それともイルクーツクを立つまえにすでに知っていたのか、にわかに断定はできない。しかし後述するように18世紀90年代にペテルブルグやモスクワで出版された歌謡集ではこの歌が *Ах, грустно……* あるいは *Ах, тошно ……* ではじまっているのに対して、バビコフのそれが光太夫の「ソフィヤの歌」同様、*Ах, скучно……* となっていることは、光太夫から聞きおぼえたとする見方にとって有力な根拠となるであろう。

ゴロヴニンはこの歌の旋律を知っていたであろうか。いずれにしても、ペテルブルグにおける光太夫とよく似た情況のなかで、同国人が書きのこしていった望郷の歌を読んだときの感想をこの海軍士官は書きとめていない。

『北槎聞略』とゴロヴニンの手記以外には、日本における「ソフィヤの歌」に言及しているものはない。帰国した光太夫が終身軟禁の状態におかれたこと、『北槎聞略』が「此編を撰するや、固より事隱密に係る。あえて外行すべき書にあら⁷⁾ずとして一般に流布しなかつたことなどの理由から、この歌はごくかぎられた範囲にしか知られなかつたのであろう。光太夫がもち帰った他のおびた⁸⁾だしいロシア土産同様、日本最初のロシア歌謡がその後どのような運命をたどったか不明である。

注

- 1) 上掲『北槎聞略』, p. 4.
- 2) 同上, p. 54.
- 3) Файнберг, Э. Я. Русско-японские отношения в 1697-1875 гг. М. 1960, стр. 53.
- 4) 平岡雅英, 前掲書, p. 85.
- 5) Файнберг, Э. Я. op. cit., p. 54.
- 6) Головнин, В. М. Записки флота капитана Головнина о приключениях его в плену у японцев в 1811, 1812, 1813 годах, СПб. 1816, ч 1, стр. 95-96.
- 7) 上掲『北槎聞略』凡例, p. 3.
- 8) 光太夫が当時の蘭学者たちと交際したこと、たとえば、寛政六年の芝圃堂新元会(いわゆるオランダ正月)にも出席したことが知られている(亀井高孝『大黒屋光太夫』, 昭 39, p. 203)。そのような席で、もし座興に「ソフィヤの歌」がうたわれたとすれば、甫周以外にも「日本最初のロシア歌謡」を耳にする機会をもった者はいたわけである。

ロシア歌謡、すなわちピアノ・ギターなどの伴奏による単旋律の独唱のための世俗的なロマンスがペテルブルグやモスクワでうたわれるようになったのは 18 世紀の後半からといわれる。とくにピョートル一世以後西ヨーロッパからもたらされた曲や音楽技法とならんで、ロシアの各地に古くから伝わる豊かな民謡がその有力な源泉となったことはいうまでもない。19 世紀のフォルクロリストとして名高い П. А. ベッソノフは、詩人のデルジャーヴィンがピョートルの娘エリザヴェータの治世（1741-1761）を「歌謡の世紀」と呼んだ事実を引用しつつ、当時の歌謡流行のありさまを次のように描いている。

おちこちの地方からたえず歌謡の波がモスクワにおしよせてきた。モスクワはその編曲と利用を引き受けた。このようにしてモスクワはそこで生まれた多数の「自分の」歌謡をもつようになった。幾個所にもあった遊戯場は、歌謡のどよめきのため耳も聳せんばかりであった。個人の家の庭でも、歌謡の聲が聞かれ輪舞の姿がみられた。門のわきの床几という床几が、通りが、小路が、十字路が、広場が、郊外の空地が、これらの歌を耳にし、踊りを目にしたのである。²⁾

事態は首都のペテルブルグにおいても変わらなかったであろう。

歌謡集が出版されるようになったのも 18 世紀の後半からである。最初の本格的なものとしては、作家の М. Д. チュルコフの編纂になる『歌謡集』³⁾ 4 巻が 1770 年から 74 年にかけてあらわれた。これはのちに、やはり作家で啓蒙思想家としても知られた Н. И. ノヴィコーフの手によって増補改訂され、6 部に分けて出版された。⁴⁾ これらの歌謡集には民謡のほかに、同時代の詩人たちの作品も収められていた。散文よりも戯曲や詩が優勢であった当時の文学は、今よりずっと深く音楽とかかわっていたのである。「詩はリラの子なり。うたうものなり、読むべきものならじ」⁵⁾ とこのころの歌謡集の扉にみえる。

初期の楽譜づき民謡集としては 1782 年に出た В. Ф. トルトーフスキイのものと、⁶⁾ 1790 年の Н. А. リヴォフと И. プラーチ共編のもの⁷⁾ が有名である。

さて、「ソフィヤの歌」の一ヴァリエントとみられる歌謡をはじめて収録したロシアの歌謡集は『新ロシア歌謡集』第一篇（以下 НРП I と略称）で、これには次のような長い副題がつけられていた。⁸⁾ 「恋愛・輪舞・牧人・舞踊・演劇・ジプシー・小口

シア・コサック・クリスマス・庶民の歌謡，現下の戦役において敵の敗北を記念したる歌謡，およびその他もろもろの機会にちなんで編まれたる歌謡合わせて 145 篇」。編者は不明，出版地はペテルブルグ，発行者は当時音楽関係の有力な出版業者であったシュノール，1790 年に初版が出たらしい。⁹⁾「ソフィヤの歌」はこの歌謡集で 24 番の番号をもつ歌の一部（第一節と第二節）であるが，24 番は 23 番の歌に対す返答の形をとっているので，次に二つの歌をまとめて掲げよう。〔 〕のなかの番号と大意をつたえる訳は，いま便宜上筆者が付したもの。正字法は現代風に改めた。

23.

Ах! тошно мне На своей стороне! Отъезжаешь Покидаешь Мил сердечной меня.	2	〔I〕 ああ，やるせない ふるさとにいて。 わたしをはなれ わたしをすてて いとしい君はいってしまう。
Голубчик ты мой! Разлучаюсь я с тобой; Здесь не будешь Позабудешь Что была я твоя.	2	〔II〕 こいしいあなたと 別れるわたし。 あなたは去って わすれましょう， 心をささげたわたしのことを。
А я молода Буду помнить всегда, Как со мною С молодойю Миловался дружок.	2	〔III〕 娘のわたしは 忘れはすまい， まだうら若い 乙女のころに たがいに愛した人のことを。
Дорожкой пойду Во зеленом саду И листочки И цветочки Все поблекнут, мой свет.	2	〔IV〕 小道に沿って 庭に出れば， そよぐ木の葉も 咲く花々も ひとつ残らず色あせる。
А где ты с другой Свыкнешься, драгой; В дни осени		〔V〕 ほかの女と なれしたしめば 秋の日々にも

Дни весенни Там проглянут для вас.	2	春の日和が ふたりのうえにさしこむだろう。
Вздохни обо мне На чужой стороне ; Вздохнувши, Вспомлнувши, Прослезися хоть раз.	2	〔VI〕 あわれと思え 異郷の空で。 ため息をつき 昔をしのび、 せめて涙をながしてほしい。
А я для тебя Изсушу всю себя : По разлуке Буду в скуке Лиши тебя вспоминать.	2	〔VII〕 あなたのために 身もかれるほど。 別れてのちは うれいにしずみ いつもあなたを思つていよう。
24. Ответ		返し
Ах ! грустно мне На чужой стороне ! Все немило, Все постыло, Со мной милья нет.	2	〔I〕 ああ、かなしい 異郷の空で、 ものみなすべて 心になじまぬ いとしい者とはなれては。
Здесь милой моей нет. Постыл мне белой свет ; Что бывало Утешало, Теперь плачу о том.	2	〔II〕 いとしの君はなく この世はわびしい。 たのしかった 昔をおもい 今は涙をながすだけ。
Ах ! милая моя ! Осталась от меня ; Против воли В тяжкой доле Буду жить без тебя.	2	〔III〕 いとしい者よ、 おまえを残して 泣く泣くわたしは つらいさだめで ただひとり暮していく身だ。
Куда не пойду Я тебя не найду ; Постылы		〔IV〕 どこに行こうと おまえはみえぬ。 胸はふたぎ

И не милы Все места без тебя.	2	心はわびしい おまえのいないところでは。
Нет другой никакой, Равнялась бы с тобой; Вздыхаю Вспоминаю Как была ты со мной.	2	〔V〕 おまえにかわる 女はいない ため息をつき 思い出すのは ともにすごしたおまえのこと。
Представляю себе, Говоришь будто мне; Забываюсь Откликаюсь, На твой голос везде.	2	〔VI〕 心にえがく おまえの口もと。 おもわずわたしは 答えをかえす, おまえの聲にこたえて。
Мне всякой день, Твоя мнится тень; Обернуся, Оглянуся, Ах! нет никого.	2	〔VII〕 日ごと夢みる おまえの面影, わたしはあたりを みまわしてみる しかし、だれもみあたらない。
Здесь милой моей нет. Пойду за ней во след; Где б ни крылась, Ни таилась Сердце скажет мне путь.	2	〔VIII〕 いとしの君を もとめていこう。 どこにかくれて ひそんでいても 胸の思いが教えてくれよう。
Не мило уж нигде, Грусть равна мне везде; Поражает, Разлучает, Рок жестокой меня.	2	〔IX〕 心なじまず いずこもかなしい。 わたしをおそい ひきさいたのだ, 運命のむごいさだめが。
Свершилось все со мной, Разлучился с драгой. Сердце рвется, Мысль мятется, Миновался покой.	2	〔X〕 すべてはおわり おまえと別れた。 胸ははりさけ 思いはみだれ 安らぎは戻ってこない。

На своей стороне	(XI)	ふるさとにいて
Не забудь обо мне;		忘れないでくれ。
Вдыхавши,		ため息をつき
Вспоминавши,	2	昔をしのび
Будь также верна мне. ¹⁰⁾		かわらぬ誠をささげてほしい。

上の二つの歌は、前者が故郷を去った恋人に呼びかける女の歌、後者はその恋人たる男からの返答であって、完全に対応している。ともに1節が5行からなる詩型をもち、*на своей стороне* と *на чужой стороне* が呼応するばかりでなく、内容的には No. 23 の V, VI に対する No. 24 の V, XI のなかに問答の性格が顕著にあらわれている。

光太夫のヴァリエーションでは実は異郷にある女が恋人をしのんでいるのに対して、この No. 24 では故郷を去った男が郷里の女をなつかしんでいる点は注目にあたいする。第一節第五行から第二節第二行までの詩句にもいくぶん相違がある。

ところで『新ロシア歌謡集』第一篇が出た翌年、つまり 1791 年にその第二篇（以下 НРП II）があらわれた。出版地、発行者は変わらず、副題も前回どおりであるが、収められた歌の数は 142 篇となっている。この第二篇の 63 番の歌のテキストを次にかかげてみよう。

Ах! тошно мне	(I)	ああ、やるせない
На чужой стороне!		異郷の空で。
Всё не мило,		ものみなすべて
Всё постыло		心になじまぬ
Друга милого нет.		いとしの君なく。
Друга милого нет,	(II)	いとしの君なく
Не гляделаб я на свет,		生きるもつらい
Что бывало		たのしかった
Утешало,		昔をおもい
О том плачу теперь.		つらい涙をながすのみ。
В любимом леску	(III)	愛する森で
Я питаю тоску,		うれいにしずめば
Все листочки,		なべての木の葉
Все кусточки,		なべての茂みが

- Там об милом мне твердят.
- Представя самой,
Что сидит милой мой,
Забываюсь,
Откликаюсь
Часто на голос твой.
- 〔IV〕 心にえがく
いとしい方を。
思わずわたしは
答えをかえす
あなたの声にこたえて。
- Ах! где дорогой
Свыкается с другой
Дни осенни
Для веселья
Там проглянут для вас.
- 〔V〕 ほかの女に
心をうつせば
秋の日々は
たのしみのため
ふたりのうえにさしこもう。
- Ах! тошно мне
На своей стороне,
Слезы льются,
Не уймутся,
В них отрада моя.
- 〔VI〕 ああ、やるせない
ふるさとにいて。
涙はながれ
ながれてやまぬ。
涙こそわがなぐさめ。
- Ах! как-то мне жить,
Ах! как-то мне тужить,
Отъезжает
Покидает
Мил сердечной дружок.
- 〔VII〕 ああ、生きるすべ
泣くすべもない。
わたしをはなれ
わたしをすてて
いとしい君はいつてしまう。
- Голубчик ты мой,
Разлучаюсь я с тобой,
Где ни будет
Не забудет
Что была я твоя.
- 〔VIII〕 こいしいあなたと
別れるわたし。
どこにこうと
わすれずにあれ
心をささげたわたしのことを。
- А я молода
Буду помнить всегда,
Как со мною
С молодойю
Миловался дружок.
- 〔IX〕 娘のわたしは
わすれはすまい
まだうら若い
乙女のころに
たがいに愛した人のことを。

- Дорожкой пойду
 Без тебя во саду,
 Все листочки,
 Все кусточки,
 Все заблѣкнут без тебя.
- 〔X〕 小道に沿って
 ひとり歩めば
 なべての木の葉
 なべての茂みは
 君なくて色あせてしまう。
- Вздохни обо мне
 Во чужой стороне,
 Вспомнявши,
 Воздохнувши
 Хотя слезку пролей.
- 〔XI〕 あわれと思え
 異郷の空で。
 昔をしのび
 ため息をつき
 せめて一粒涙してほしい。
- А я молода
 Сушу всё себя ;
 Я в разлуке
 Буду в скуке
 О тебя всё вспоминать.
- 〔XII〕 娘のわたしは
 身もかれはてる。
 別れていては
 うれいにしずみ
 いつもあなたを思っていよう。
- Ах тошно мне
 На своей стороне,
 Всё не мило
 Всё не постыло,
 Друга милого нет.
- 〔XIII〕 ああ、やるせない
 ふるさとにいて
 ものみなすべて
 心になじまぬ
 いとしの君なく。
- Друга милого нет,
 Я пойду за ним в след.
 Где б ни скрылся,
 Ни таился,
 Сердце скажет мне ¹¹⁾ путь.
- 〔XIV〕 いとしの君を
 求めていこう。
 どこにかくれて
 ひそんでいても
 胸の思いが教えてくれよう。

この歌では НРП I の No. 23 と No. 24 が奇妙な混淆を呈している。すなわち I, II, IV, XIII, XIV は No. 24 から, III, V, VI 前半, VII ~ XII は No. 23 から入っている。それも IX をのぞいて他のすべての節に多少なりとも語句の異同があり、結果的には、女が故郷にいて恋人をしたっている場合 (V, VI, VII, VIII, XI, XIII) と、みずから異郷にある場合 (I, II) があって、内容が首尾一貫しない。男女の問答の形は消え失せており、全体が女の立場からうたわれている。おそらく НРП II No. 63 は НРП I No. 23 と No. 24 の混合変形したものとみることができるのであ

ろう。HRP I が出版されてから No. 23 と No. 24 が大いにもてはやされたとすれば、1 年前後のあいだにこの程度のテキストのくずれを生ずることはさして驚くにあたるまい。また元来歌謡の愛好者が婦人に多いといえるならば、No. 24 までが女の気持をうたったものになってしまったことも容易にうなずけるであろう。

HRP II No. 63 の最初の 2 節は、HRP I No. 24 の I, II よりはるかに光太夫のヴァリエントに近い。No. 63, I. 1 の тошно が光太夫では скучно, II. 5 の теперь が光太夫では я となっている点だけに相違がみとめられ、内容としては全く同一のものと考えられる。光太夫がペテルブルグに滞在したのも 1791 年の 2 月から 11 月にかけてであったことを思えば、これら二つのヴァリエントのあいだに何らかの関係を想定するのがむしろ妥当であろう。

HRP I の No. 23 と No. 24 は 18 世紀 90 年代のいくつかの歌謡集に入った¹²⁾。そのうちのひとつは 1792 年に出版された M. ボポーフ編の『ロシアのエラトー』で、その第三篇 No. 55, No. 56 がそれである¹³⁾。テキストは No. 24, I. 1. грустно がここでは грусно, XI. 5. также が такъ же となっているほか異同はない。もうひとつは 1797 年から 98 年にかけて発行されたもので、普通 2 人の出版者の名を冠して『ゲルステンベルグとディトマルの歌謡集』と呼ばれているものである¹⁴⁾。全部で 3 篇からなり、問題の歌は第一篇の No. 32 としてまとめられている。テキストは HRP I とほとんど同じであり、ただ一個所 No. 24, V. 2 の с тобой がここでは со мной となっているのは単純な誤りで、最近の翻刻版では с тобой に訂正されている。この歌謡集ははじめて「ソフィヤの歌」の楽譜を含んでいる点で貴重な価値をもっている。

これより少しおくれて 1816 年に出た『最新歌謡全集』では No. 23 と No. 24 が別々に分けて収められている¹⁵⁾。すなわち前者はこの歌謡集の No. 85, 後者は No. 347 で、両者のあいだの特別の関係はもはや意識されていない。歌詞には次のような相違がみられる。HRP I No. 23, V. 2. свыкнешься → спознакомишься; HRP I No. 24. I. 1. грустно → скучно; II. 2. постыл мне → мне не сносен; III. 2. осталась → отставала; III. 4. доле → доли; V. 5. была ты → была бы ты; VI. 5. везде → часто; X. 1. свершилось → совершилось; X. 2. драгой → дорогой; XI. 5. также → такъ же。1816 年の歌謡集に光太夫（およびバビコーフ）のヴァリエントの第一節第一行と同じ скучно があらわれていることは注目される。概して語彙にモダニゼーションのあとがいちじるしいのは、ほぼ四半世紀のずれがあるためであろう。

一方、1796 年にモスクワで出版された『袖珍歌謡集』の No. 62 として収められている歌は、HRP II の No. 63 により近い。これは全部で 6 節からなっているが、

その最初の2節は次のとおりである。イタリック体は НРП II No. 63 との異同を示す。

Ах ! тошно мне
 На *своей* стороне ;
 Все *уныло*,
 Все постыло :
Моей милья нет!

Моей милья нет :
 Не *глядел бы* я на свет !
 Что бывало
 Утешало
 О том плачу теперь.

重要なのは、この歌が故郷にのこされた男の嘆きをうたっている点である。これは「ソフィヤの歌」の他のいかなるヴァリエントにもみられない特徴をなしている。第三節以下でもこの特徴は一貫してあらわれているが、歌の内容そのものは НРП II No. 63 の III, IV, XIV, VI とほぼ逐語的に一致する。

注

- 1) Гусев, В. Е. Песни и романсы русских поэтов, М.-Л., 1965, стр. 14.
- 2) Бессонов, П. А. Песни, собранные П. В. Киреевским, М. 1871. この引用は Асафьев, Б. В. Русская музыка от начала XIX столетия, М. 1930 の日本訳, 樹下節訳『ロシアの音楽』, 昭 29, p. 222.
- 3) Чулков, М. Д. Собрание разных песен, СПб., 1770 - 1774.
- 4) Новиков, Н. И. Новое и полное собрание российских песен, содержащее в себе песни любовные, пастушеские, шутливые, простонародные, хоральные, свадебные, святочные, с присовокуплением песен из разных российских комедий и опер, М. 1780 - 1781
- 5) Карманный песенник, или собрание лучших светских и простонародных песен, М., 1796 の中表紙に Les vers sont enfans de la lyre, / Il faut les chanter, non les lire. と書かれている。
- 6) Трутовский, В. Ф. Собрание русских простых песен с нотами, СПб., 1782.
- 7) Львов, Н. А., Собрание русских народных песен с их голосами, положенными на музыку Иоганом Прачем, СПб., 1790.

- 8) Новый российский песенник, или собрание любовных, хороводных, пастушьих, плясовых, театральных, цыганских, малороссийских, казацких, святочных, просто-народных, и в настоящую войну на поражение неприятелей и на разные другие случаи сочиненных 145 песен, СПб., И. К. Шнор.
- 9) В. М. Сидельников の『1735-1945年ロシア民謡索引』Русская народная песня. Библиографический указатель 1735-1945 гг., М., 1962, стр. 6 では 1791年初出。筆者がレニングラードのサルトゥコフ-シチェドリン名称公共図書館で調査したところでは、再版が 1791年にあらわれている。ロシア文学研究所の В. Е. Гусев 教授からの 1966年8月28日付書簡によれば、レニングラードのアカデミー附属図書館稀観書部の所蔵本には 1790年印刷と明記されている由。ここでは Гусев 教授にしたがう。ただし同書からの引用はすべて 1791年の再版からである。
- 10) Новый российский песенник, ч. 1, СПб, Изд. 2-ое, 1791, стр. 27-30.
- 11) Новый российский песенник, ч. 2, СПб, 1791, стр. 65-67.
- 12) Русские песни XVIII века. Песенник И. Д. Герстенберга и Ф. А. Дитмара, под ред. Б. Вольмана, М., 1958の注釈者によれば、これらの歌は以下に述べるほか、1792, 1794, 1799年の各歌謡集にも採録されているという(стр. 320)。ただしそれらはいずれも筆者未見のため、ここではふれない。
- 13) Попов, М. Российская эрата, или выбор наилучших новейших российских песен, СПб., 1792. ч. 3. No. 55 は стр. 83-84, No. 56 は стр. 84-87.
- 14) これは Русские песни XVIII векаなる表題で 1958年に翻刻された(注 12 参照)。ч. 1, No. 32 は翻刻版の стр. 93-94 にみえる。
- 15) Новейший полный всеобщий песенник…… СПб., 1816. このうち No. 85 は стр. 84-85, No. 347 は стр. 262-263。
- 16) Карманный песенник…… М., 1796. その No. 62 は стр. 84-85.

6

ロシアではかなり早くからいわゆる「ソフィヤの歌」を詩人の Ю. А. Нелединский-Мелетский の作とする説が確立している。1850年ペテルブルグの有力な出版業者 А. Ф. Смирдин によって出版された『ネレдинский-Мелетский 作品集』¹⁾にはすでにこの歌が収められている。ここに掲げられたテキストは6節からなり、若干の語句の相違を別とすれば、上で述べた 1796年モスクワ発行の『袖珍歌謡集』に収められたヴァリエントに最も近い。以下はその全文である。

Ох! тошно мне

[I]

На чужой стороне;

Всё постыло
 Всё уныло ;
 Друга милова нет.

Милова нет ;
 Не глядела б на свет.
 Что, бывало,
 Утешало,
 О том плачу теперь.

〔 II 〕

В ближнем леску
 Лишь питаю тоску
 Все кусточки
 Все месточки
 Там о милом твердят.

〔 III 〕

Будто со мной
 Там сидит милой мой,
 Забываюсь ;
 Откликаюсь
 Часто на голос свой.

〔 IV 〕

Милова нет !
 Ах, пойду за ним вслед ;
 Где б ни крылся,
 Ни таился,
 Сердце скажет мне путь.

〔 V 〕

Ох, тошно мне
 На чужой стороне !
 Слёзы льются,
 Не уймутся :

〔 VI 〕

В них отрада моя.

著名な文学史家 С. А. ヴェンゲーロフが 19 世紀から 20 世紀にかけて編集した浩瀚なロシア詩人叢書中の一冊『Ю. А. ネレヂンスキイ-メレツキイ全詩集²⁾』にも、上記のテキストはそのまま収録された。

それからずっと下って第二次大戦後にも、ともに『詩人文庫』叢書に属する 2 冊の詞華集『18 世紀詩人集³⁾』と『ロシア詩人の歌謡とロマンス⁴⁾』がいずれもネレヂンスキイ-メレツキイの作品として「ソフィヤの歌」を採っている。しかもそのテキストは 1850 年のスミルヂーン版とほとんど変わらない。唯一の相違点は、新しい二つの詞華集では III. 4 が Все листочки となっていることだけである。

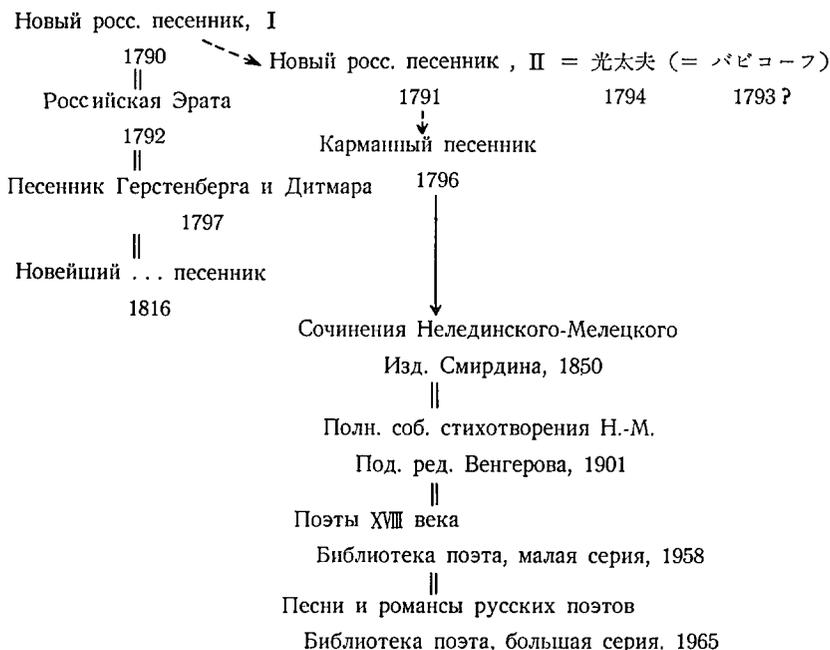
このように前世紀のなかば以来、いずれ劣らぬ権威をもつと考えられる少なくとも四つの版が一致した見解にしたがっているにもかかわらず、1850 年のスミルヂーン版のヴァリエントをそのままネレヂンスキイ-メレツキイの作に帰することには疑問がある。その理由は、スミルヂーンが依拠していると考えられる 1796 年のヴァリエントは前述のように НРП II No. 63 を抄録したものであり、さらに НРП II No. 63 は НРП I No. 23 と No. 24 が混淆したテキストであるからにほかならない。いまこの関係を表にして示せば次のようになる。

スミルヂーン版 1850	『袖珍歌謡集』 No. 62 1796	НРП II No. 63 1791	НРП I 1790
I	I	I	No. 24 I
II	II	II	No. 24 II
III	III	III	No. 23 IV
IV	IV	IV	No. 24 VI
V	V	XIV	No. 24 VIII
VI	VI	VI	No. 24 I

これらのヴァリエントのうち、詩人の作品として最も整然たる形式をもっているのは、НРП I の No. 24 である。НРП I の No. 23 がネレヂンスキイ-メレツキイと同時代の詩人 П. М. カラパーノフの作品であることには疑問の余地がない。彼の生前に出版された詩集にこの詩がすでに収められているからである。⁵⁾ おそらくネレヂンスキイ-メレツキイがカラパーノフのこの作品に「返し歌」をつくり、それが НРП I に No. 24 として採録されたのではないだろうか。(詩人の作品が民謡とまじって歌謡集に収められる慣習があったことは前述した。) そしてこの歌がたちまち流行した結

果、いくつものヴァリエントを生んだものと推定される。故郷と異郷 свой/чужой, 男の恋人と女の恋人 милого/милой などの反意語を適宜に入れかえたり, грустно/тошно/скучно, немило/уныло/постыло などの同意語を取捨選択することによって, この歌のヴァリエントは容易に生じうるし, またそれゆえにこそさまざまな立場の多くの人びとに好んでうたわれる可能性もあるのである。入手しえたかぎりでのテキストによってこの歌の系統を図示してみよう。

「ソフィヤの歌」の系統想定図



ユーリイ・アレクサンドロヴィチ・ネレヂンスキイ-メレツキイは 1752 年モスクワで生まれた。父は近衛士官で、幼いときに母を失った。69 年から 70 年までストラスブール大学に留学, 帰国後 85 年まで軍隊に勤務した。この間第一次露土戦役に参加し, プスコフ, キーエフなどにも駐屯したほか, コンスタンチノーブルへもおもむいたことがある。33 歳の若さで退役した直接の動機は当代随一の頭官のポチョムキンと口論したためといわれる。皇太子のパーヴェルに近い有名な外交官パーニンと縁つづきであって, エカテリーナの宮廷では重んじられなかったようである。退役後はモスクワに開設された中学校 Главное народное училище の校長となり, パーヴェルの即位とともに皇帝直属の国事秘書に任命された。1800 年には元老院の議員に

指名され、その後 1826 年カールガに隠栖して 28 年にそこで没した。

ネレヂンスキイ-メレツキイが詩を書きはじめたのは 70 年代の後半、ほぼ 25 歳のころである。芸術愛好をもって知られたゴロヴィーン伯爵家の親しい友としてたえずそのサロンに出入りし、ダーリアとナターリアのふたりの姉妹に多くの詩やロマンスをささげた。この姉妹の美声は有名で、とくにナターリアは本格的なオペラを演じた記録さえ⁶⁾のこっている。ヴェンゲーロフ編の詩集に付された解説によれば、1776 年から 85 年ごろまで、詩人はプレシチェーエヴァ某なる少女にはげしい恋心をいだいていたという。報われずにおわたこの恋は、愛のかなしみをうたったおびたしい数の詩を生んだといわれるが、「ソフィヤの歌」がそのひとつかどうか不明である。

彼のロマンスでは「小川のほとりへ」ではじまる 11 節からなる作品が最もよく知られている。しかしその冒頭の句 Выду я на реченьку 自体は民謡でよくうたわれていたもので、すでにリヴォフ=ブラーチの楽譜づき民謡集に入っていた⁷⁾。ネレヂンスキイ-メレツキイは民謡から最初の一行を借り、その旋律に合わせて全くあたらしいロマンスをつくりあげたわけである。コンスタンチーノフ氏が指摘するように⁸⁾、「ソフィヤの歌」においても同じ手法が用いられたという可能性もある。すなわち Ах, тошно мне, на чужой стороне ではじまる一節ないし二節は、ほかの歌謡ないし民謡からの借用であるかもしれない⁹⁾。

B. ヴォリマンがすでに述べているように¹⁰⁾、男女の愛をうたったロシア民謡では一般に愛するものと結婚できない事情（たとえば娘の父親の反対あるいは若者の出征）を具体的にうたったものが多いが、18 世紀後半の詩人たちははじめて恋の喜びや悲しみの気分をそのものとしてうたい上げるようになった。ネレヂンスキイ-メレツキイの活躍した時期は、ロモノソフ、スマローコフによって代表される古典主義の支配が次第にくずれ、カラムジーンを旗手とするロシア・センチメンタリズムが文学の主流を占めようとする時期にあたっている。ネレヂンスキイ-メレツキイは、ドミートリエフ、ニコレフらとともに、古典主義の牙城であるまさに韻文の分野にはじめてセンチメンタリズムを導入した。庶民の個人的感情を自由に表現すべき新しい抒情詩のジャンルの先駆者として、彼らの果たした役割は軽視できない。

同時代人のデルジャーヴィンはネレヂンスキイ-メレツキイを「最もすぐれた歌謡作者」のひとりと呼び¹¹⁾、ジュコーフスキイは次のように評したことが知られている。「若干の歌謡の作者……その作品は民謡としてうたわれている。ドミートリエフの完全無欠にはとおく及ばないが、胸をうつ情熱がある。ながく彼の作品がもてはやされるのはこのためにほかならぬ¹²⁾」

注

- 1) Сочинения Ю. А. Нелединского-Мелецкого, Изд. А. Смирдина, СПб., 1850. 「ソフィヤの歌」が収録されているのは 頁. 10 - 11. この書物からの引用, ならびに次の注 2 への言及は前記 Ю. К. Бегунов 教授からの私信にもとづく。
- 2) Русская поэзия, вып. VII, под ред. С. А. Венгерова, Полное собрание стихотворений Ю. А. Нелединского-Мелецкого, СПб., 1901, стр. 13.
- 3) Поэты XVIII века, Л., Изд. 3-ье, 1958 (Библиотека поэта, Малая серия), стр. 374 - 375. ここでは詩の末尾に〈1796〉と注されているが, これが『袖珍歌謡集』を意味するとすれば, この注記は不適当である。すでに述べたように, この歌謡集に収められたヴァリエーションは独特のものであるから。
- 4) Песни и романсы русских поэтов, М.-Л., Изд. 2-ое, 1965 (Библиотека поэта, Большая серия), стр. 127 - 128. ここでは詩の末尾に〈1791〉という注記がつけられている。НРП II No. 63 をさしているが, 節の数ばかりでなくテキストの内容にかなりの異同がある。
- 5) П. М. Карабанов (1764 - 1829) の作品は詩人の生前二度出版された。НРП I No. 23 は 1801 年に出た最初の詩集に含まれている。この詩集のテキストは第一節の冒頭の 2 行を除いて НРП I No. 23 と一致する。興味あることに, НРП I No. 23 でかえられた冒頭の 2 行 Ох! Как-то мне жить!/Ох! Как не тужить! はすこし変更られて НРП II No. 63, VII の最初の 2 行としてあらわれている。
- 6) Ливанова, Т. Русская музыкальная культура XVIII века, т. II, М., 1953, стр. 288.
- 7) Львов, Н. А. op. cit. その翻刻版が 1955 に出版されている (под ред. в. М. Беляева, М.)。その No. 75 として《Выйдуль я на речиньку……》がみえる (стр. 176)。この歌は『ゲルステンベルグとディトマル歌謡集』にも収められている (前掲翻刻版, стр. 178 - 179)。
- 8) Константинов, В. М. Первая русская песня в Японии. op. cit., стр., 280.
- 9) しかしネレデンスキイ-メレツキイがソフィヤ・イヴァーノヴナの作品からこの 2 節を借用したと考えることはできない。彼女が光太夫と知り合ったのは НРП I が出版された翌年であるから。とはいえ, 甫周が『北樞聞略』に記録したのは 2 節にすぎず, それは光太夫が知っていた「ソフィヤの歌」の全文ではなかったと考えられなくもない。したがって, ソフィヤ・イヴァーノヴナなる婦人が光太夫のためにいかなる歌もつくらなかった, と断定もできない。
- 10) Вольман, Б. Русские печатные ноты XVIII века. Л., 1957, стр. 182.
- 11) Песни и романсы русских поэтов, М.-Л., 1965, стр. 126.
- 12) Ливанова, Т. op. cit., стр. 30 による。

「ソフィヤの歌」はどのような旋律によってうたわれたのであろうか。

前述のように、この歌がはじめて楽譜づきで出版されたのは 1797 年の『ゲルステンベルグとディトマルの歌謡集』においてである。同書の最近の翻刻版によってその曲を示せば次のとおりである。¹⁾



この旋律は、翻刻者が注で指摘しているとおり²⁾、ウクライナ民謡のものである。本歌は「おお、緑の……」Ой, гай, гай, гай гай, зелененький で、その曲は 1779 年に出たトルトーフスキイの楽譜づき民謡集にも、1790 年のリヴォフ＝ブラーチ民謡集にも収められている。次の (a) がトルトーフスキイ、(b) がブラーチの編曲になるものである。³⁾



18 世紀末のペテルブルグにおいては、ウクライナの歌謡が大いにもてはやされていたらしい。⁴⁾トルトーフスキイ自身ウクライナのハリコフ地方の出身であり、全部で 80 曲からなる彼の民謡集にはウクライナ歌謡が 18 曲収められている。

とはいえ、このころの民謡収集はフィールド・ワークを重視する厳密な方法によるものではなかった。これはひとつには、都会にいても充分素朴な民謡を耳にする機会があったという理由によるものであろう。この事情を音楽史家の B. B. アサーフィエフは次のように説明している。

かつての都会の家は領地も同然だった。田舎から都会への物資輸送には、輸送隊の恒常的な循環が要求された。かくて、歌謡も人について都会へ流れ込み、都会か

ら流れ出ていった。それゆえに、18 世紀の都市の歌謡の多くは民謡に近く、民謡はまた都市の歌謡に近いのである。⁵⁾

「ソフィヤの歌」の曲はその歌詞同様、19 世紀に入っても何度か出版されている。以下、参考までにこれらの楽譜を別挙しておこう。

まず 1847 年には M. ペルナルドが本歌のウクライナ民謡「おお、緑の……」をピアノ伴奏づきの歌唱用に次のように編曲している。⁶⁾



この楽譜は 1866 年にも再版されている。⁷⁾

19 世紀中葉コペンハーゲンで出た『スラヴ民謡集』にもこの曲は収められている。⁸⁾ ただし曲の題名は「春のよろこび」Vaarglæde となっており、つけられた歌詞は春をたたえるものである。この歌謡集の注によると、メロディは上記のペルナルドによっているらしい。⁹⁾



また年代不詳のものに、Ах, тошно мне на чужой стороне と題され、ピアノ用に編曲されて伝わっている楽譜がある。出版地はベテルブルグ。その主旋律の最初の部分だけを示してみよう。



ところで、スミルザーンが刊行した『ネレヂンスキー-メレツキ作品集』では、Ох! тошно мне ではじまる詩の冒頭に「『わが乙女よ』の曲による」На голос: 《Девчина моя》という指示が付されていた。最近の諸版でもこの指示はそのまま踏襲されている。「わが乙女よ」のメロディは「おお、緑の……」にきわめてよく似ている。最近キーエフで出版された『ウクライナ民謡集』には双方の曲が収められているが、「おお、緑の……」は前述のリヴォフ=プラーチ版と全く一致し、一方、「わが乙女よ」は次のようになっている。¹⁰⁾



なお記述が前後するが、次節で述べる「ソフィヤの歌」の替歌の旋律を便宜上ここにかけおこう。1936 年に出た C. ブゴスラフスキと И. シシコフ共編の民謡集にみられるものである。¹¹⁾



注

- 1) Русские песни XVIII века, op. cit., стр. 93. 以下「ソフィヤの歌」の楽譜については、レニングラードのロシア文学研究所の Б. М. Добровольский 教授からあたえられた資料にもとづくところが大きい。
- 2) *ibid.*, стр. 319.
- 3) *ibid.*, стр. 319.
- 4) Б. Асаур-Фиеф, 前掲『ロシアの音楽』, p. 223. 著者によれば, 18 世紀を通じてウクライナが首都に有能な音楽家とすぐれた歌手を供給していたという (p. 269)。
- 5) 同上, p. 226-227.
- 6) Бернад, М. Песни русского народа, собранные и аранжированные для пения с аккомпанементом на фортепиано. СПб, 1947.
- 7) Сидельников, В. М. op. cit., стр. 17, стр. 21.
- 8) Berggreen, A. P. Slaviske Folke-sange og Melodier, samlede og udsatte for Pianoforte. Kjöbenhavn, 1868, p. 63.
- 9) *ibid.*, p. 212.
- 10) Украинські народні пісні, Київ, 1960. 311 頁に Дівчино моя, переяславко なる曲がある。
- 11) Бугославский, С., Шишков, И. Русская народная песня. М. 1936. 313 頁. この替歌のメロディの他の二つのヴァリエーションが Попова, Т. В. Русское народное музыкальное творчество. вып. 3. М. 1957, 310-311 頁に収められている。

「ソフィヤの歌」がロシアにおいてたどった運命もまた劇的とよぶにふさわしいものであった。

1822年専制政治の改革をめざして組織された秘密結社「北部協会」に、その翌年詩人のリュレーエフが参加した。立憲君主制を理想とするペテルブルグの「北部協会」は、ウクライナの「南部協会」にくらべて元来穏和な性格をもっていたが、リュレーエフは「北部協会」のなかで共和主義的な主張を展開し、次第に会の指導権を獲得していった。

『ドゥーマ詩集』によってすでに詩人としての名声をえていたリュレーエフは、会員の志気を鼓舞するために一種の革命歌が必要であると考えたらしい。1823年から24年の冬にかけて、リュレーエフはやはり「北部協会」の会員で作家として知られたA. A. ベストゥージェフとともに、当時よくうたわれていたメロディをもとにして、「栄光」Славаと「ああ、やるせない、生まれ故郷にありながら」Ах, тошно мне и в родной сторонеの二つの歌をつくった。後者の本歌が「ソフィヤの歌」にほかならない。リュレーエフの替歌はいつか民衆のあいだにひろまって、たとえばネヴァ川の櫂すべりなどでたえずうたわれたという¹⁾。

1825年12月、ニコライ新帝の即位を契機に「北部協会」のメンバーは首都元老院広場で蜂起したが、協会内部の不統一のため蜂起はあえなく鎮圧された。リュレーエフらのえたものは、12月の名にちなんでデカプリストと呼ばれロシア史上ながく記念される名誉だけであった。ツァーリの政府は秘密結社のひろめた革命歌にひどく神経をつかっていたものらしく、デカプリストの裁判ではこの「人心を攪乱する歌」（検事のことば）についても、取り調べることを忘れなかった。リュレーエフは僚友をかばって単独でつくったことを主張したが、ベストゥージェフはこの歌の作詞に協力したことをみづから証言した。

「ああ、やるせない、生まれ故郷にありながら」の現存テキストは6部である。そのうち最も古いものは1823年から24年にかけて最初につくられた形を示し、比較的新しいもののなかにはゲルツェンがロンドンで発行していた文集『北極星』の1859年の号に発表されたものがある。このほかリュレーエフが獄中で書いたもの、ベストゥージェフの自筆のものもあるが、すべてのテキストは多少なりとも他と異なった内容をもっている。実さいにこの歌がうたわれていくうちに、新しい歌詞が加わったり、適宜に省略がなされたものにちがいない。

文学史家のЮ. Г. オクスマン教授による最近の研究によれば、この歌は全部で18節²⁾からなるといわれる。以下にその最初の3節をかかげよう。

Ах, тошно мне
И в родной стороне;
Все в неволе,
В тяжелой доле,
Видно, век вековать.

ああ、やるせない
生まれ故郷で。
自由はなく
つらいために
一生を送る身の上だ。

Долго ль русский народ
Будет рухлядью господ,
И людьми,
Как скотами,
Долго ль будут торговать?

ロシアの民は
いつまで地主のがらくた道具、
人間なのに
家畜のように
いつまで売り買いされるのか。

Кто ж нас кабалил,
Кто им барство присудил;
И над нами,
Бедняками,
Будто с плетью посадил?

おれ達を奴隷にしたのはだれ、
やつらを旦那にしたのはだれだ。
哀れな奴隷を
打たせるために
やつらに鞭をもたせたのはだれだ。

.....

リュレーエフは 1826 年 7 月 13 日、他の 4 人のデカбриストたちとともに絞首刑に処せられた。ツァーリの政府はリュレーエフとベストゥージェフのつくった「人心を攪乱する歌」をうたうのを厳禁したが、それは革命の伝統ともにながく人びとの心のなかに生きのこった。

注

- 1) Попова, Т. В. Русская народная песня. М., 1962, стр. 37.
- 2) Оксман, Ю. Г. Агитационная песня «Ах, тошно мне и в родной стороне». Литературное наследство, т. LIX, Декабристы-литераторы I, М. 1954 стр. 85 - 100. この歌のヴァリエーションのなかには「Ах, скучно мне/На родимой стороне. …」ではじまるものもある。これは当時「ソフィヤの歌」が「Ах, тошно……とうたわれたり、Ах, скучно……」ではじまったりしていたことと軌を一にしている。デカбриストたちの発言のなかに、「おお、緑の……」についての言及が全くないことは、当時すでに一般にはそれが「ソフィヤの歌」の本歌であるという意識は存在しなかったことを示している。

(補注) ソヴェトの作家 Ю. Н. Тынянов の小説 Кюкля によれば、のちのデカбриスト

のひとりキューヘリベッケルがツァールスコエ・セローのリツェイに在学中、彼をからかって、リツェイのなかで次のような歌がうたわれたという。(Ю. Н. Тынянов. Избранные произведения. М. 1956. стр. 18)。

Ах, тошно мне
 На чужой скамье!
 Все не мило, все постыло,
 Кюхельбекера там нет!
 Кюхельбекера там нет—
 Не глядел бы я на свет.
 Все скамейки, все линейки
 О потере мне твердят.

(以下省略)

このエピソードの出所は明らかでないが、当時「ソフィヤの歌」が盛んにうたわれていたもうひとつの証拠となろう。リツェイ卒業直後、級友同士であった詩人プーシキンとキューヘリベッケルが決闘を行なう原因となったプーシキンのエピグラム……И кюхельбекерно и тошно. (ibid., стр. 40) は上記の替歌を下地にしているのであろう。

本稿の作成にあたっては、資料入手などの点で亀井高孝教授、Ю. К. Бегунов、В. Е. Гусев、Б. М. Добровольский、В. М. Константинов 其他の方々の援助を受けた。ここで感謝の意を表したい。

(1966. X. 11)